きぼうのいえ ニュースレター

2013年 春号

特定非営利活動法人 きぼうのいえ
〒111－0022 東京都台東区清川 2 丁目 29 番 12 号
電話：03-3875-7523　Fax：03-3875-7525
E-Mail：kibounoie777@mbm.nifty.com
ホームページ：http://www.kibounoie.info

山谷の人々をこの街のガンジス河へと招く旅路

施設長　山本雅基

私がインドのコルカタにある、マザーテレサの手による「死を待つ人の家」(現地語で「カリガート」〈心の清い人の家〉と呼ぶ）施設を訪問したのは４年前になる。

全旅程 10 日余り。ここでも一言では言い表し難い経験をしたのだが、途中３日ほど、そこでのボランティアを離れて、列車に揺られ８時間ほどの小旅行をした。目的地はコルカタから数百キロ西へ移動したバラナシ。そこでガンジス河の陽の入りと、ヒンズー教徒のプージャと呼ばれる宗教行事を見て、翌朝の陽の出に与ろうというのだ。バラナシに到着し、丸一日市内観光をした後、いよいよ夕陽に照らされたガンジス河が見えてきたとき、胸に長年にわたり詰まっていた感情が吐露されるように、私の目から滂沱と泪が溢れてきて留まることを知らなかった。それは、私の魂が永久の彼方から求めていた故郷に帰還したような、私の全存在を優しく包むような雄大さに満ちたものだったからである。

マザーテレサの施設では、そこに住まう人々が天に召されるとき、その人独自の宗教に添って祈りを行い、弔いを行うと聞いていた。ガンジス河畔には、数多くの火葬場があり、そこに柩に入れられた遺体が到着すると、それぞれの宗教の形で祈りが捧げられ、その骨はガンジス河に流されていく。

そこではマザーの信仰の霊性と、ガンジス河の霊性が見事に一致しているように私には見えた。そこには、全ての生きとし生けるものを分け隔てなく受け取り、悠久の彼方に受け渡していくいのちの大河の姿があった。

インド訪問以前、私が山谷の日本基督教団山谷伝道所の前を、愛猫を抱いて散歩しているとき、数人の路上生活者から声を掛けられた。「あんた、きぼうのいえの人だろ」「そうだよ」「きぼうのいえで亡くなった人には墓があるんだってね」「うん」「いいなあ、俺たちは生きているときもホームレスだけど、死んでもホームレスだよ」。このやり取りに私は行く末に留まる処を持たないものの、侘しさと痛切な寂寥感を感じ取った。あまりにも切ないその心の叫びに、私の胸は張り裂けんばかりであった。

ガンジス河での夕陽と、神々しいまでの陽の出に与り日本に帰国したとき、私の心に一つの決意が固まっていた。これまで諸々の事情から無縁仏として葬られなければならなかった、山谷の全ての寄る辺なき、身寄りなき人々に、長野のきぼうのいえの墓所を開放しよう。きぼうのいえの墓所を、（２面につづく）

きぼうのいえでは私どもの活動にご賛同頂ける皆様方にご支援・ご寄付をお願いしています。
振り込み方法は ①郵便振替、②銀行振込み、③インターネット募金 の3つがあります。
ご協力頂けますよう、お願い申し上げます。

① 郵便振替の場合	② 銀行振込の場合 (※1)	③ インターネット募金
郵便振替番号:	みずほ銀行 三ノ輪支店 普通	ホームページからアクセスして、
00190－6－388670	口座番号:1284037	カード決済することもできます。
名義:きぼうのいえ後援会	名義:特定非営利活動法人きぼうのいえ	http://www.kibounoie.info/index.html

※ 1 銀行振込の方で領収書が必要な方はメール等で連絡先をお知らせ下さい。
正会員希望の方は、お手数ですが事務局までご一報下さい。

（１面からつづく）山谷のガンジス河にするのだ！ そして山谷の地から天界へ召され、飛翔した魂の平安に地を提供するのだ！ 私がその思いを抱いてから数年、ゆっくりとしてではあるが、その思いはますます堅牢なものとなって、私の心に炎のように燃え続けている。

祈りのうちに

２度あることは３度ある？

スタッフ TT

Ｓさんと私が出会ったのは５年ほど前です。区内のある施設でスタッフとして働いていると、Ｓさんは利用者として入ってきました。陸上部で鍛えた体、８０才をこえてもかくしゃくとしています。書道は４段の腕前、どことなく品格のある笑顔、施設にくる日もスーツをダンディに着こなしています。やがて１年くらいたつと病が発見され、入退院をくり返し、Ｓさんは１人暮らしの不安を訴えるようになりました。

その後、私は５年余り勤めたその施設を退職することになり、いよいよ勤務最終日、あいさつを終えて花束をいただいた私に、利用者代表としてＳさんがお別れのスピーチをしてくれました。それは…「もし、ダンナと離婚したら私と一緒になって下さい」というジョークで、お別れ会は本当に大ウケでした。

それから一年後、私はきぼうのいえのスタッフになりました。またたくまに半年が過ぎた春の日、先輩スタッフが「こんど入居する方、珍しい名字ね、なんて読むのかしら？」と言うので、おどろいた私は思わず「この人、知ってる！」と叫びました。そして入居当日、「久しぶり～覚えてる？」「ああ、覚えてるよ」と再会を喜んだのです。だいぶやせていたみたい。

ちょうど二年前のお別れはジョークのプロポーズで、その後、まさかの再会をはたし、そしてとうとうこの夜明けに二度目のお別れです。あのときと同じ九月、今度は私がお別れのスピーチをしますね。「いつかまた会えるような気がします。今度はあちらの世界で再々会しましょう！」

Ｋさんにとっては四年ぶりの外出だったのに、もっと空いているときに来ればよかったなと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。翌日、そのことを伝えると、Ｋさんは笑って「そんなことないよー」と言ってくれました。

至らないことばかりでしたが、私にとっては忘れられない思い出となりました。こんな関わりがあったおかげで、Ｋさんとの距離がグッと近くなったような気がします。

Ｋさん、本当にありがとうございました。

一個小隊出撃

最初はとても妙な組み合わせと思ったのですが、ＨさんとＹ子さんが一緒に散歩へ出掛けて行きます、ボランティアのＭさんにつき添われて。

いつも、途中のタバコ屋のベンチに座ってひと休みするのが決まりだそうで、その際、いつもＨさんがＹ子さんにコーヒーを買ってあげるのだけど、缶が熱いのでタオルでくるんで渡してあげるのがちょっとした気遣いポイントみたいです。

先日は散歩後、Ｈさんの部屋に集まっていたので「二次会ですか？」と聞くと、Ｈさんの九〇云歳の誕生日をお祝いしているという話でした。

毎週その背中を見送るのがちょっとした楽しみです。

（Ｓ）

○人形劇、やりました。○

昨年のクリスマスには、いつものティーサービスの余興という位置づけで、有志による人形劇をやりました。演目は「星の王子さま」です。準備期間は半年くらい、上演時間は 30 分、そして小道具は 30 ヶ以上、高校の部活動みたいなノリでした。やってるスタッフが楽しんだのはもちろんですが、「みなさん、最後まで飽きずに見てくれるかなぁ？」「いや、喜んでくれてたみたいよ」「本当？」という状態でした。主役の王子さまは今も食堂に飾ってあります。（…と書いた翌日には撤去されていましたが）

■３人組の童話

スタッフ R さん談―「最初は朝、玄関のとこで Y さんが自販機で買ったコーヒーを２つ持って歩いてるのを見かけたの。そのときは、あぁ、何度も上と下を往復するのは面倒だから２つ買ったのかなぁって思ったんだけど、あとで談話室にいたら、A さんがやっぱりコーヒーを２つ持ってきて、Y さんに飲みなよって渡したのね。なるほど、そういうことかって思ったの。そしたら夕方、今度は O さんがね、やっぱりコーヒーを２つ持って歩いてたのよ。それみて笑っちゃった、ホントあの３人、仲がいいんだなぁって。ちょっと状態の悪いひとに元気なひとが何かしてあげるってのはあると思うんだけど、そうじゃなくって、みんな対等なのね。そういうのっていいなって思わない？」

ボランティア S―「おんなじ場面が３回繰り返すのって、なんだか童話や民話みたいですね」

■声なき声

「M さんが○○って言ったから…」などと喋っていると、ときどき「M さんって喋れないのに、なんでわかるの？」と返してくるひとがいるのだそうで。でも、普段から接しているスタッフらは顔を見合わせて、「だって、わかるじゃんね？」と言いあいます。

スタッフ R さんの経験談によると、M さんと玄関で鉢合わせしたときのこと、M さんが大きなジェスチャーで何かを訴えてきたといいます。「え、なに？牛乳？」―よくわからずにいると、隣りにいた入居者の I さんが「肉まんじゃない？」と言うので「肉まんを買ってくればいいの？」って聞いたら正解だったそうです。でも、当時、I さんもまた病気で発話ができないひとだったのでした。声の出せないひと２人に囲まれて、手話もなしに不思議なコミュニケーションが成り立っていたこと、そして「肉まんじゃない？」という言葉が正確に聞こえたことをスタッフ R さんは教えてくれました。

わたしの場合、M さんの面白いジェスチャーはときどきマンガにしてノートに描いているのですが、どうやら決まったパターンがあるわけではなく、ひとつひとつが１回きりの芸術品のようです。今日は「プリンが食べたい」と言われました。最後の「シナモン味」の部分だけわからず少し時間がかかりましたが、落ち着いて行きつ戻りつ質問しながら、よく表情をみていると案外合理的にわかります。そして慣れてくると、ごく稀に途中をすっ飛ばして瞬時にわかることがあります。そんなとき、彼らの「声ならぬ声」が脳裏に響いているような気がします。

成田山珍道中記

スタッフ IK

一月にKさんと一緒に行った成田山参りは大変な珍道中でした。

人出が多く、新勝寺の本堂には上がったものの、車イスのKさんは賽銭箱に近づくことができませんでした。参道にあるお目当てのうなぎ屋さんは行列ができていて入れず、どこでもよいからと入ったお店では注文を忘れられ、昼食はなしとなりました。せめてもと食べた屋台の肉まんはいまいちで、これならばと食べたうなぎの串焼きも「牧場のホットミルク」も残念の味でした。

花を咲かせる心

スタッフ　下条知加子

先日ある司祭様からこの本が郵送されてきた。手渡す機会がなかったからとわざわざ送ってくださったのだ。本を開いてみると、字も大きくて読み易く、新書版でバッグにも入れやすかったので職場への行き帰りに電車の中で読み始めたのだが、書かれている言葉の温かさに引き込まれ、一気に読んでしまった。

三〇歳間際で修道院に入り、三六歳の若さで思いがけずノートルダム清心学園の学長に任命された渡辺和子さんが、様々な苦労の中からつむぎだした言葉が短いエッセイと共に載せられている。心に響く言葉を反芻していると、不安にざわざわと揺らめく心が落ち着いて来る。

渡辺和子著
『置かれた場所で咲きなさい』
幻冬舎　二〇一二年

「置かれたところで咲きなさい」というのは、「初めての土地、思いがけない役職、未経験の事柄の連続」が「当初考えていた修道生活とはあまりにもかけはなれて」いたために「自信を喪失し、修道院を出ようかとまで思いつめた」筆者に、一人の宣教師が渡してくれた短い英語の詩の冒頭の一行である。彼女の話によると、元の英語では「神さまがお植えになったところで咲きなさい」という言葉だったところを彼女自身が「～置かれたところで～」と変えて訳したとのことだ。

私にとって「置かれたところで…」というこの言葉は心に深く響くものだった。今ある自分、今置かれている場所や境遇、家族の状況が必ずしも順調と思えず、そのような状態になったことを他人のせいにして「こんなはずじゃなかった」と不満に心を奪われていた。自信を失い「仕方がない」とあきらめてしまっていた。けれども「環境の奴隷」になるのではなく、神さまがあえて私をここに置かれた（植えられた）のだと考え、その中で『『咲く』努力」をすれば、私にもきっと「私らしい花」を咲かせることができるに違いない。私も「花を咲かせる心」をもち続けたいと思った。

きぼうのいえの入居者さんも、それぞれ様々な苦労をして来られたに違いない。こんなはずではなかったという思いもきっとあるだろう。けれどそのような思いを超えて、ささやかでもいい、その人らしい花を咲かせることができたら…。きぼうのいえがそんな場になれたらと願う。

■編集後記■

この２年ほど、ニュースレターを定期的に発行していますが、時折「そんなことをする金銭的な余裕はあるのですか」とご質問をいただくことがあります。たしかにそうした心配をわたしたちも感じているのですが、ただ、発行する意味はあるだろうと考えています。

ひとつは活動報告の意味です。ご存じのようにわたしたちの活動は多くをご寄附に負うかたちで成り立っているので、そのご寄附いただいた方々へとむけて、「みなさんから頂戴したご寄附でこのような活動をしています」と報告する義務があるだろうと思うのです。ここに掲載してあるのはごくごく日常的な出来事ばかりで、なるべく等身大のすがたに近いものをお届けしたいと考えています。

また、使っている用紙は最安値であり、印刷は障がい者の授産施設を利用し、来客にパンフレットとして配る便などがあります。このように決して無駄な出費にならぬよう、いくつかの点に注意しながら、そのつど「これで大丈夫だろうか」と自問しながら発行しています。

ご批判を含め、後援会ならびにご支援くださる方々からご意見・ご理解を賜れば幸いです。

◆　◆　◆

なお、これもしばしばご質問いただくのですが、振替用紙はこちらからお送りしたものですと振込手数料がかかりません。必要があればご一報ください。また、わたくしどもは認定ＮＰＯではありませんので、ご寄附は税金控除の対象になりません。念のため、ご留意いただければと思います。（Ｓ）